

森林ネネツ (ロシア・西シベリア) のトナカイ牧畜 — 先行研究概説 —

吉田睦

キーワード：西シベリア、森林ネネツ、トナカイ牧畜、ツンドラ、タイガ

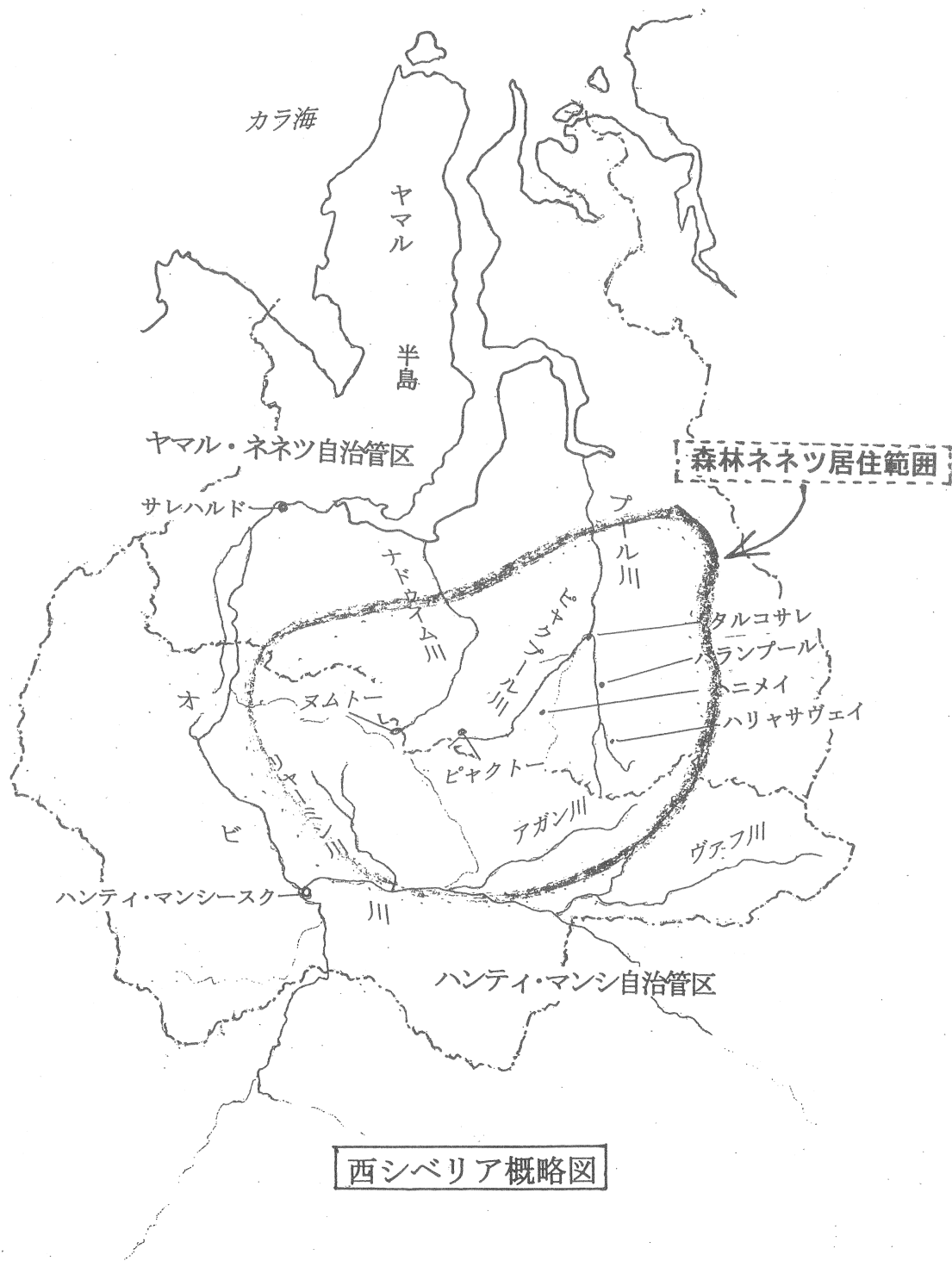
1. はじめに

本稿は、ロシア連邦西シベリアに少数居住する森林ネネツという民族集団について、その複合生業活動の中でも重要な位置を占めてきたトナカイ牧畜に焦点を当て、先行研究を取りまとめて簡単に概説するものである。

森林ネネツ (露語： лесные ненцы；英語： Forest Nenets) はロシア連邦のヨーロッパ・ロシアから西シベリア北部を経てエニセイ川河口付近に至る広範な地域にかけて居住するネネツの下位集団で、ネネツの中では少数派である。森林ネネツの特徴は、言語学的にネネツの多数派であるツンドラ・ネネツ方言と区別される森林ネネツ方言である。居住地もツンドラ・ネネツの居住地である景観的に単調なツンドラ地帯より南部の地域、一部ツンドラから森林ツンドラ、さらにタイガ地帯へと植生が遷移していく、相対的に複雑な自然帯・植生帯であることが、ツンドラ・ネネツとの差異となっている。行政的には、ヤマル・ネネツ自治管区の南部地域とハンティ・マンシ自治管区の北部の境界付近の諸地域にローカルグループを構成しつつ、分散して居住している。

ネネツはロシアの少数先住民族の一つで、2002年の国勢調査のデータによると41302人を数える、このカテゴリーの中では最大の少数先住民族である。他方、下位集団の森林ネネツは民族カテゴリー「ネネツ」として処理されているため、国勢調査時のデータを含め行政当局の統計において森林ネネツとしての人数は示されていない。近年の概数は2000人余とされる (FN18:4)。

我が国においては、ツンドラ・ネネツに関しては数人の研究者が1980年代以降、いくつかのネネツの居住地域に実際に現地調査し、その結果を発表・報告しているⁱ。しかし森林ネネツについては、2008年3月に本稿筆者のグループが実施したヤマル・ネネツ自治管区プール地区プール川中流域での調査ⁱⁱまで、本邦の人類学者で現地調査を実施した者もおらず、従って何らの論考もないのが現実でありⁱⁱⁱ、それが本稿執筆の理由でもある。



これらの著作においては、森林ネネツは、主に言語的特殊性、孤立小集団としての指摘、或いは氏族、親族集団の中で取り上げられている程度で、N7を除き詳細な記述はなされていない。特にトナカイ牧畜に関しては言及がほとんどない。そもそも、「森林ネネツ」に該当する民族小集団が把握・認識されたのはいつか、という問題が提起されうる。本稿はこの問題に立ち入る余裕はないが、19世紀のネネツの状況につき史料を基に概説したN7において、森林ネネツについて言及がなされている。それによれば、森林ネネツは歴史的に、地方行政レベルでカズィム・サモエード（Казымские самоеды）やピヤン・ハサヴォ〈Пян-хасаво〉と呼ばれ、史料においてもその記述が見られる。その一族と思われる住民の人数としてスルグート郡カズィム行政区の人口の変動をみると、18世紀末から19世紀にかけての統計（1795年第五調査と1816年第七調査）においては、森林ネネツとみなされる氏族の合計はそれぞれ476人と416人が記録されている（N7:52;表5）。また、1858年の第十回調査では511人、1897年の全露国勢調査時に467人が数えられている（それぞれN7:55,56）。とはいえこれは森林ネネツの全数ではない。

1920年代のいくつかの文献資料には、森林ネネツについて一つの下位民族集団として記述されたものが散見されるようになる。

これらの中で、まずネネツの親族関係研究の枠内において森林ネネツないしそれに該当する氏族とその名称、外婚制の分析を中心とする研究が行われてきた（N1-5; FN5）。そのうち1930年代に立て続けに出されたV.G.ヴェルボフの論考（N2, FN5）は、ネネツの親族関係の中での森林ネネツの氏族関係の特徴を炙り出し、その後の親族研究の基礎を築いている。L.V.ホーミチはその分野の研究も含めて2つの著作を著しているが、特に1976年の著作の紙幅の多くは親族関係の分析に割かれている。これらの従来の親族関係に関する先行研究を前提に、森林ネネツの親族、氏族関係を詳述したのがM.A.ゼニコ・ネムチーノヴァの『シベリア森林ネネツ—歴史民族学的概説』（FN18）である。その第1章（pp.17-68）がこの問題に捧げられている。しかし、ここではトナカイ牧畜に問題を限定しているので、親族関係研究についての言及はしないことにしたい（同書におけるトナカイ牧畜関連部分はpp.85-104で、その部分については後述する）。

森林ネネツのトナカイ牧畜についての明示的な情報は、末尾のN（ネネツ関係文献—本稿関係のもののみ）、FN（森林ネネツ関係文献）、そしてWS（それ以外の西シベリア諸民族研究関連文献—本稿関係のもののみ）の諸文献資料において散見されるのが実態であるといえる。それらを概説するのが本稿の目的であり、

主として時系列的に説明したい。

2. 1920-30年代

まず、森林ネネツ、或いは森林ネネツと確認可能な住民についての記述が現れ始める1920年代のものをいくつか引用したい。

最初に、1925年に著されたI.N.ドブロヴァ・ヤドリツェヴァの『トゥルハンスク地方の原住民』(WS2)には、森林ネネツとみなされる住民の記述がある。トゥルハンスク地方は、現在のヤマル・ネネツ自治管区ターゾフスキー地区をも含む、エニセイ川流域を領域とする地方行政単位であった。そこでは森林ネネツは「ユラク(юраки)」ivの一部として、『ハンデヤール(хандеяр)』即ち森林サモエード(лесные самоеды)」という民族名で取り上げられ、集計上、ターゾフスキー地区を遊動するユラクとして扱われている。しかし、同書筆者は「その民族名(ハンデヤール)自体が、ツンドラを遊動するユラクの風俗とはいくらか異なるものを持っていることを示している」旨指摘し(WS2:72)、「ユラク」と「ハンデヤール」の差異性を認識していることを表明している。

それより時は少し遡るが、1923年にヤマル・ネネツ自治管区東部、現在のプール地区からターゾフスキー地区においてロシア科学アカデミー・ロシア地理学協会の調査を実施したB.N.ゴロトコフは、その報告の一つ(FN1)において、森林ネネツの居住地であるアガン川とプール川流域の現地先住民族に関する情報も少なからず記載している。vそこに居住するのが自称«neshen»(男、我々の意)のRuan-khasavo(森林ネネツ)(同論文には森林サモエード、森林ユラク(лесные юраки)の異称も示されている:FN1:62)であり、いくつかの氏族に分かれること等の情報を先行研究(WS1)等に依拠しつつ解説している(FN1:62-63)。そこでは、漁労の記述は詳細になされているが、トナカイ(牧畜)に関しては僅かである。トナカイを保有する場合も、プール川上流域やアガン川の住民では、漁労の重要性が指摘されている。それに対して、同川中流域では、トナカイ牧畜により重要性がある。上流域では夏営地は恒常的性格を有するのに対して、中流域ではテント周辺に倉庫のような恒常的建造物がなく、荷物を橇の上に収納する、という相違点である。またトナカイ牧畜管理法の相違点として、プール川上流域では夏季のトナカイ群を自由放牧させて漁労に専念する。また、プール川中・上流域に野生トナカイがいて、狩猟対象となっていた(FN1:64-68)

1930年に刊行されたG.A.スタルツェフの『サモエード(ネンチャ)』(N1)は、

ネネツに関する民族誌的著作として、この時期としては豊富な分量のものといえる。しかし内容には、学術性、信憑性に粗密があるようである。森林ネネツについては、「森林サモエード」としての言及があるが、トナカイ牧畜についてはツンドラ・ネネツの特徴が述べられているに過ぎない (N1:68-72)。

同じ 1930 年に著された N.トカチェンコの 3 頁に満たない小文「森林サモエード (パニホサヴォ)」(FN4) は、明示的に森林ネネツについて記載されたものとしては、初期の文献の部類に入るものとして取り上げる価値があるといえる。「パニホサヴォ」は、ネネツ語ツンドラ方言で森林ネネツを意味する 〈пяд хасава〉: 〈пя〉〔森林〕+ 〈хасава〉〔男; 東方ネネツの自称〕の誤記といえる)。ここでは、プール川流域に居住する森林ネネツの一族アイヴァセダ氏族に限定した記述がなされている。即ちアイヴァセダ氏族の生業状況 (トナカイ飼育数、流行病、毛皮獣狩猟、漁労) を述べた後、住民の状況 (男女比率のアンバランス、識字率の低さ) を指摘、富裕者からの搾取から解放しソヴィエト的文化的な生活へ組み込む必要性を説いた内容である。トナカイ牧畜に関しては、彼らにとって「トナカイは生存の主要な根源」であり、「移動手段、住居、衣服、食糧全てがトナカイに依存している」という記述がある (FN4:88-89)。これはほぼ同時期の上記のゴロトコフの記述とも比較してその相違点に疑問が湧くが、プール川中流域の富裕トナカイ保有世帯のケースではないかと推測される^{vii}。

森林ネネツの研究史において現在でも学術的価値を持ち続けている 1936 年のヴェルボフの論考『森林ネネツ』(FS5) は、親族関係に紙幅を多く割いているが、トナカイ牧畜を含む生業について 2 頁余の言及がある。彼らのトナカイ頭数は 50-100 頭で、地域によってはより少ない (10-30 頭)。但しプール川流域を遊動領域とする家族は多数頭を擁している (FN5:63-64)。「トナカイ牧畜はタイガ型トナカイ牧畜の一連の特徴を有している。夏季、蚊の季節の終わり頃にトナカイを自由放牧にするが、これはハンティ、セリクープ、ケットにみられる方法である。遊動範囲は小さい。秋季にトナカイを集めて、リス猟のために森林に向かう。」(FN5:64)

更に、サヤン地方起源とする荷駄騎乗型のトナカイ牧畜の残存がみられる点を指摘している。その例としては、荷駄用鞍 (pohosow) があり、またプール川上流域でトナカイ騎乗が、当該調査当時より数十年前に行われていたことを記憶する老人についての言及がある (FN5:64)。

3. 1950年代以降

その後の森林ネネツに関する民族学的研究は、第二次世界大戦の影響による中断期を挟んで、ようやく1950年代に研究が出はじめる状況である。著名な『世界の諸民族誌』の一冊である『シベリア諸民族』(N3)におけるE.D.プロコフィエヴァの項目「ネネツ」には、森林ネネツに関する情報として、居住地などに言及があるほか、トナカイ牧畜については若干の記述がある程度である。しかしその中には次のような興味深い指摘もある。即ち、「プール川流域の森林ネネツのトナカイ牧畜は(ヨーロッパ・ネネツの南部地区居住ネネツと同様)、通常の森林型のそれの特徴を呈している。そこでは小規模の群が森林において放牧され、冬の遊動ルートは夏季のそれとは40-60km、時に100km程度離れているに過ぎない。森林ネネツのトナカイは大型故にツンドラ・ネネツが喜んで入手しようとする。」(N3:614)。

この次に1966年に著されたL.V.ホーミチの『ネネツ—歴史的民族学的概説—』(N4)を取り上げる。残念ながら現在に至るまで、この民族誌を超えるネネツ全体の包括的民族文化的研究は出版されていない。そればかりか、同書は1995年に、事実上一部加除訂正(ソ連期の部分を削除し、他の論文を追加)して装丁を変えた形で復刊すらしている(N7)。300頁を越える同書において、トナカイ牧畜には12頁程度が割かれているに過ぎない。20世紀におけるネネツ研究の第一人者として不動の地位を占めているL.V.ホーミチにして、トナカイ牧畜についてはこの程度しか論じることができなかった、ということで一定の憶測を呼ぶことになろう。また、ソ連民族学が、トナカイ牧畜を一つの文化的総体として扱ってこなかったこと、また当該民族文化の文脈でその文化的意味や機能について分析してこなかったこととも、勿論関係することであろう。同書のトナカイ牧畜言及箇所にはヤマル半島と一部ヨーロッパ・ネネツのツンドラ・ネネツの状況が記述・解説されているが、森林ネネツのトナカイ牧畜に関する記述はない(N4:50-61)。1995年の版においても、トナカイ牧畜に関しては、旧版と同様の記述となっている(N4:50-60)。

同著者により専ら森林ネネツを取り上げた形の唯一の論文が「森林ネネツの生業と文化の若干の特徴」(FN7;1976年)である。16頁のこの論文においては、トナカイ牧畜については1パラグラフのみを割いている。筆者によれば、森林ネネツの主要生業は狩猟と漁労であった(FN7:200)。トナカイは移動手段として利用したことが、ツンドラ・ネネツとの顕著な相違点の一つである(FN7:201)。その

特質はタイガ型であるとし、タイガ型トナカイの個体の大きさがツンドラ・ネネツのそれより大きいことを挙げている。次に牧畜管理方法の相違点として、蚊の出る季節に分水域にある湖沼近傍の開放地で放牧し、蚊遣火を使ったことを挙げている。ハンティ、ケット、セリクープでみられるトナカイ小屋は見られない。蚊のシーズンが終わると秋まで森に自由放牧させるが、これはタイガの住人であるハンティ、ケット、セリクープ、森林エネツと同様としている。遠方に行かないように木製足枷トウイ・ピャ（〈ты пя〉；〈ты〉：トナカイ、〈пя〉：木）を使うことがある。遊動範囲は小さい（FN7:201-202）。なお、野生トナカイ猟が行われ、宿営地に解体して持ち込まれた屠体に対する儀礼行為が R.P.ミトゥソヴァ（FN3）からの引用として記されている（FN7:201）。

西シベリア地域諸民族の生業、特にトナカイ牧畜研究者 V.A.コジミンは、いくつかの論考において森林ネネツについても一定量の紙数を費やしている。1986年に著された「西シベリアのタイガ地帯の現代トナカイ牧畜の発展における伝統」（FN9）においては、森林ネネツには2頁余が割かれている。本論文では、冒頭において、ソ連民族学における研究を前提としたトナカイ牧畜の類型の分類法やその評価等が論じられているが、本稿ではその問題には立ち入らないことにする。さらに、上記のヴェルボフ、プロコフィエヴァ、ホーミチの説の範囲内で、森林ネネツの牧畜システムの特徴点の検討を行っている。それによれば、以下の4つの類型が示されている。

- (1) E.D.プロコフィエヴァの手稿資料や B.N.ゴロトコフ（WS2；上掲に紹介）に依拠し、森林ネネツで最も原初的な（傍点：本稿筆者）トナカイ牧畜の形態の一つが、プール川上流域に局限されて存在するが、それは夏季にトナカイを自由放牧させるものである。
- (2) 二つ目はプール川中流域に特徴的なもので、西シベリアのタイガ地帯に広範に普及している半自由放牧システムの適用形態であるとする。また、この地域のトナカイ牧畜にはハンティ系氏族のカズィムキンから多頭数トナカイ牧畜文化の影響を受けたことを指摘する。特徴点として、夏季の夏営地近傍での放牧、蚊遣火（宿営地内において、1.5-2mの棒を円錐形に組み立てた内部にコケと粘土で覆った焚き火）の使用、トナカイ小屋の欠如等である（この点についてはホーミチとプロコフィエヴァの説にも依拠している）。

現在（執筆当時の1980年代）は、国有トナカイには柵を設けることも

あるが、個人所有トナカイは伝統的方法で放牧している。その方法は以下の通りである。蚊のシーズンが終わるとトナカイはタイガに解放放牧され、初雪の頃にリーダー個体を投げ縄で捕獲するか、犬の助けを借りて集群する。夏季の放牧時には犬は使用しない。冬季は狩猟時の輸送手段として使われる。とはいえ、この例がどこのものであるかの記述はない (FN9:46)。その他には足枷の使用 (前足に着用する)、足枷が欠如する場合は太い枝を首枷として首に結びつける方法が指摘されている (FN9:46)。プール川中流域のトナカイ牧畜ではツンドラ・ネネツに近い牧畜形態に接近してきているといえる。即ち、夏季も冬季もトナカイ橇を使用し、肉利用や材料としての利用がなされる。しかしこれらは 20 世紀の現象であり、ツンドラ・ネネツからの影響が明白である (FN9:46)。

- (3) 三つ目の類型はツンドラ・ネネツと接触のあるグループであるが、このグループはナドゥイム川やプール川下流域にごく僅かの人数存在する。(同論文執筆当時)
- (4) 四つ目は東部ハンティの牧畜システムと同一のものであるリャーミンググループの森林ネネツ(ハンティ・マンシ自治管内のオビ川中流域の支流リャーミン川流域に居住)に特徴的なものである。

筆者によれば、これらのうち (1) と (2) が森林ネネツのトナカイ牧畜システムとして一定の関心を引き起こすものとし、これらの相違は、歴史的に構成されたものではなく、経済的・進化論的に形成されたもの、という結論を添えている。(FN9:47)

同じ筆者による西シベリアのトナカイ牧畜研究の集大成である『西シベリア諸民族のトナカイ牧畜』(WS7; 2003 年)においても森林ネネツについての言及があるが、紙数は少なく、かつ上掲書 FN9 と多くの点で重複している (WS7:27-31)。そこでは、森林ネネツのトナカイ牧畜において以下に示す 3 つの共通する特徴が挙げられ、上掲書と同様の 4 類型を紹介している：

- (1) 群の小規模さ (リャーミン・ネネツ—20-30 頭; ナドゥイム・ネネツ—5-30 頭; プール川中流域—50-100 頭)
- (2) 狩猟・漁労活動の補助としてのトナカイ牧畜の利用は輸送目的
- (3) サモエード式トナカイ輸送法

その他の点では、A.V.ゴロヴニョフ (N6) を引用し、飼育トナカイ頭数の増減と恒常的建造物の規模や欠如の関係を述べている。更にトナカイ牧畜が南シベリ

アからタイガ地帯を経てツンドラ地帯に進出するプロセスと、トナカイ小屋（トナカイが自ら集結するように建てられたシェルター様の建造物）の有無、その規模についての関係を述べている。しかし具体的事例や根拠は示されておらず、推測の範囲を超えていない。

最後に森林ネネツのトナカイ牧畜固有の要素を羅列している。即ち、汎サモエード的用語、サモエード型トナカイ輸送法、橇の一頭立てが可能、最近までの冬季のみの橇利用、二頭立ての橇、橇の副獣（先導個体ではない牽引個体—本稿筆者注）の端綱への木製頬当ての使用、より少数かつ垂直に近い橇の支柱と橇の（乗用部の—本稿筆者注）高さの低い橇、薄い木屑の敷物、貨物橇と索具の間の結合部の滑車状部品の欠如、貨物橇の機能的類型数の少なさを挙げている。（WS7:30）

時代は前後するが、オビ川中流域右岸（北岸）の主要支流流域において東ハンティ、及び居住領域を共にする森林ネネツの自然利用について考察したのが I.A.カラペトヴァ、Z.P.ソコロヴァ、K.Yu.ソロヴィヨヴァの共著になる『東方ハンティと森林ネネツの民族社会的状況と伝統的自然利用の諸問題』（FN12; 1995年）である。この地域は執筆当時の 1995 年には石油・天然ガス開発が既に相当程度進展しており、現地の少数先住民族の生活、生存の状況に対する危機感が語られるようになって既に久しい時期であった。そのような状況の下で、この地域のハンティと共にリャーミン、アガン川の森林ネネツの自然、土地利用の状況を概説している。森林ネネツは経済開発が行われる前は、（ハンティより）相当多い頭数のトナカイを擁して完全な遊動生活を送っていたり、宿営地で伝統的生業活動に従事していたが、1950 年代以降の集落統合等により、生活様式が一変することになった（FN12:6, 12）。なお、この地域では最下流のリャーミン川流域のリャーミングループの森林ネネツは、ハンティ化して民族伝統を失っている（FN12:14）。

西シベリア諸民族の歴史的経済類型の著書（WS6）のある A.V.ゴロヴニョフは、その中で森林ネネツのトナカイ牧畜類型にも勿論言及している。しかし、そこにおける類型形態は、モデル的、理念的なものであり、民族誌的、描写的なものではないため、ここでは省略したい。

4. 近年（2000 年以降）の研究

ロシア科学アカデミー民族学・人類学研究所（モスクワ）と同シベリア支部考古学民族学研究所の共同監修による『民族と文化』シリーズの一つで 800 頁の大著である最近刊（2005 年）の WS8（ゲムエフ I.N., モロージン V.I., ソコロヴァ

Z.P.責任編集、『西シベリアの諸民族：ハンティ・マンシ・セリクープ・ネネツ・エネツ・ガナサン・ケット』モスクワ：ナウカ、2005)において、ネネツには100頁が費やされているが、そのうち、A.V.ゴロヴニョフの「生業・暦」には15頁のみが割かれ、更にならで森林ネネツのトナカイ牧畜については、森林ネネツの生業集団(ХО: Хозяйственное объединение)についての20行のパラグラフでごく簡単に言及されているに過ぎない。

そこでは森林ネネツのトナカイ牧畜の特徴が、他の生業活動と共に概説的に述べられている程度である。但し生業集団という枠組みで、彼らは1-2家族からなる生業集団(宿营地)を形成して、個別に複合生業に従事すること、夏の半期には好魚場である湖沼ヌムトーとその近傍(約100km東方)の湖沼ピャクトー近辺(前者はハンティ・マンシ自治管区ペロヤルスク地区東部、後者はヤマル・ネネツ自治管区プール地区南部に位置する)には、数十という家族が集結する、というような個別情報には一定の関心が向けられる(WS8:415-416)。

近年は、ネネツに関しても先住民族出身の民族学者、民族宗教・芸術研究者、博物館キュレーター等が活躍してきており、その中には著書や諸論文を精力的に出版する者も少なくなくなっている。元タルコサレ郷土博物館のキュレーターの森林ネネツ P.G.トゥルーチナもその一人とみなされる。FN17はその表題『森林ネネツ・プールの大地の物語』が示すように、伝承、説話が主要内容であるが、その中に生業暦(FN17:24-25)、家畜トナカイの耳印の事例17例、並びに13人の古い祖先の毛印(ピッテマ;脇腹の毛を削る所有標識)viiiと耳印の意味を記した一覧表が掲載され(FN17:92-93)、牧畜管理という観点から興味深い。生業暦については、後述 I.A.カラペトヴァの生業歴の指摘にもあるように、各月の名称に各種トナカイ関連のものが多く付けられていることを示して興味深い。

森林ネネツのフィールド調査を含む民族学的・人類学的研究者として現在活動している者としては、MAゼニコ・ネムチーノヴァと I.A.カラペトヴァを特に挙げておくべきであろう。このうち、前者が2007年に『シベリア森林ネネツ―歴史民族学的概説』(FN18)を著したことで、森林ネネツに関する包括的民族誌といえる著作が初めて実現したものといえる。カラペトヴァは、ロシア民族学博物館(サンクト・ペテルブルグ市)の研究員、キュレーターである。

I.A.カラペトヴァの2001年の論考FN15(『森林ネネツの生業複合におけるトナカイ牧畜の位置』)では、森林ネネツの居住環境がタイガ北方の河川の氾濫原の森林や、居住領域の50-60%を占めるツンドラ状の植生を呈する湿地性の河川分水界

に分布していることと、それが彼らの生業活動の特質を規定してきたとする (FN17:206)。そのことを踏まえた上で、彼らの伝統的季節・暦に現れた生業の特徴を指摘、その中にトナカイ牧畜に関する名称等を見出している (例えば、5月－「仔トナカイ出産月」; 9月－「盛りの始まり、終わりの月」「オストナカイの月」; 10月－「大型オスの角脱落の月」等)。さらに上掲の1920-30年代の資料 (FN1; FN3等) をも参照しつつ、複合生業活動におけるトナカイ牧畜の地位を考察している。筆者の現地調査のデータとして、夏季、橇を分水域で使うこと (通行路により頭数が異なる)、牽引個体としては冬毛 (本稿筆者注: 家畜トナカイは7月頃に冬毛が脱落して夏毛に代わる) の個体を選ぶ、というものがある。また、蚊のシーズンの終わる8月後半に林地に自由放牧させ、初雪の頃集群する (FN15:208)。

筆者が結論として述べるどころとして、まず、森林ネネツのトナカイ牧畜は、タイガ地帯に居住するハンティやセリクープといった民族と共通点があること、そしてその特徴として、かなり大きい群の頭数とタイガ型とツンドラ型の放牧方法の結合を挙げている。そして、トナカイ牧畜の複合生業システムにおける役割は大きく、そのことは暦にも反映されていることを挙げている (FN15:208)。

Yu.N.クヴァシニンの「ハニメイ集落の森林ネネツ」 (FN20) は、プール川上流域の支流の一つであるアラカプール川流域にある集落ハニメイ近傍の最近 (2007年7月) の簡単な調査報告である。同集落に本部のあるピャコプール・オブシーナ (先住民企業) に森林ネネツは編成されており、そのトナカイ牧畜は、産業開発のために毎年牧地が縮小している (FN20:252)。ある地区の遊動家屋 (チュム) 10軒当たりのトナカイ頭数は1000頭程度あり、宿営地からは遠隔の (調査時期である夏季に) 風通しの良い森林のない平地で放牧する。群管理は二人の牧夫が牧犬は使わずに行う (冬季は牧犬を使う)。家屋内ではなく開放型の蚊遣火の使用について、写真入りで解説されている (FN20:254)。

M.A.ゼニコ・ネムチーノヴァの著書『シベリア森林ネネツー歴史民族学的概説』 (FN18) は本稿筆者も同書の批評者 (рецензент) の一人であるが (もう一人は上掲のV.A.コジミン)、現在のところ森林ネネツに関する最新で最も詳細な民族誌である。第二章「生業活動」の一節としてトナカイ牧畜には約20頁が割かれていて、全体 (270頁) の中では多いとはいえない。

同書によれば筆者の現地調査は、1990年代から2000年にかけて、オビ川中流域支流のアガン川流域 (ハンティ・マンシ自治管区内ニジネヴァルトフスク地区)、湖沼ヌムトー近傍 (同ベロヤルスク地区) ix、プール川流域 (ヤマル・ネネツ自治

管区内プール地区)で実施している。それに基づき、現在の各グループのトナカイ牧畜の特徴に共通するものを挙げるところでは、(ツンドラ型との比較で)少数頭群、自由・半自由放牧、蚊遣り用焚き火の建造物、トナカイ小屋、定置コラール(柵)、足枷・首枷使用、牧犬の季節的利用である。これに対してかつてプール川やヌムトー付近において数百頭ないし千頭以上の群が記録されている(ヤマル・ネネツ自治管区古文書資料)が、これは比較的最近の現象と述べている(FN18:85)。

筆者も語るように、これらのうちヌムトー近傍の森林ネネツの民族学的調査はほとんど行われてこなかったため、同書の情報は貴重といえ、また他のグループのトナカイ牧畜との比較においても有効である。とはいえ、本節のトナカイ牧畜の分析は、これまでのソヴィエト民族学の枠内で行われた特定文化要素の記述と比較、進化論的相互関係と起源論といった視点から、同書筆者の分類する森林ネネツの3つのサブグループ(ヌムトー、アガン、プール)のトナカイ牧畜とその構成要素の周辺民族からの借用や起源の問題に終始していて、トナカイ牧畜そのものの文化的・社会的意義や特質を論じるものとはいえない。そのような認識の上で内容を簡単に紹介したい。

筆者が取り上げるのは、従来タイガ地帯の諸民族のトナカイ牧畜の特質として挙げられてきた次のような諸項目である。即ち、夏季の牧畜管理法(自由放牧か半自由放牧か)、トナカイ小屋やコラール(柵)、蚊遣火(ロシア語で *дымокур*)、所有徴票(耳印や毛印)、首鈴、足枷・首枷の利用、特定幼獣の緊縛や養育、誘引用餌の使用、遊動範囲とそのルート、荷駄用鞍や騎乗の痕跡の問題、屠殺・解体法、橇の乗用法や頭数等多様な文化要素の分析である。これら個々の文化要素についての記述は同書に譲りたい。

筆者は従来の森林ネネツのトナカイ牧畜に関する研究の幅をより広げ、また上記3つのグループにおける現地調査で確認できた事実に依拠した分析を可能にした。その結果、森林ネネツのトナカイ牧畜全般の類型化の中で、多様な形態や例外も少なからず存在すること、居住領域や遊動域に基づく、トナカイ牧畜のタイガや森林ツンドラという固定的な植生帯類型への緊縛という視点を離れて、諸河川上流域の分水域でのトナカイ放牧という特定の自然地理的環境(特に夏季の放牧地としての)における適応(但し筆者はこの用語や概念を使用していない)の結果であることも述べている(FN18:86-87)。その観点から、居住環境の自然帯の類似性というより、孤立的集団を形成して分散的に居住する彼らの各グループに

における自然条件の多様性が、経済文化類型の特徴を曖昧にし、また同類型の境界の変動性や地域的特性を決定づけてもいる (FN18:87)。

このような分析は、異なるグループを現地調査した筆者ならではの、貴重な見解であるといえる。とはいえ、上記のような結論を出した根拠の具体性は欠いており、この後に続く上掲の文化要素の分析は、生態環境の特徴点とは直接の関連付けを欠いたものになっている。個々のトナカイ牧畜に関連する文化要素の中では、トナカイ小屋 (の存否) と蚊遣火の有無や諸形態、コラル (囲い柵) の形態や使用の有無には、少なからぬ紙数を費やしている。トナカイ小屋の存否や大きさ、構造は飼育頭数の規模にも関係する。蚊遣火は屋外型や屋内型があり、コラルも規模、定置性の有無といった比較対象の諸点がある。そしてこれらの特徴点を周辺・隣接諸民族におけるそれらと比較して、諸民族のトナカイ牧畜との関係の分析も行っている。(FN18:88-93)

その他にも、耳印にも言及はなされているがその具体的形態や所有徴票としての意味や役割についての分析ではない (FN18:87)。ヌムトー・グループではリーダー個体に首鈴を使用して搜索を容易にするといった記述 (FN18:87) は興味深い。というのも、本稿筆者の経験では、ツンドラ・ネネツの東部グループ (ギダン半島のネネツ) においては、そのような例は一例も見出していないからである。鈴ではないが、リーダー個体の角に音の出る金属製の用具 (現地ではタチカン〈тачкан〉と称し、中に鳴り物を入れたパイプ状の筒を角に水平状に取り付ける) を取り付けてその存在を知らしめるようにする、ヨーロッパ・ネネツ (ツンドラ・ネネツ) における実例がある。×群管理に関するものとしては、この他には足枷・首枷の使用に関する指摘がある (FN18:94) xi。

筆者はヌムトーでの現地調査を基に、成獣への給餌の例を挙げている。それは小型魚を乾燥させて細断したもので、アガン川グループとわずかながらプール川グループでもみられるとしている (実見したという記述はない) xii。

橇の二頭立て、一頭立てという、ツンドラ・ネネツではあまりみられない (特に一頭立てはまずないであろう) 橇の牽引形態にも言及がある (FN18:101)。トナカイ橇は、多くのトナカイ牧畜諸民族の間でツンドラ地帯のみならず、森林ツンドラ、タイガ地帯においても使用頻度の違いはあれ、使用されてきた。単独の橇の場合、ツンドラ・ネネツにおいては一般に 3-5 頭立てくらいで、夏季はさらにそれより 1-2 頭多いという言い方がされる。実際には冬季でも負荷が大きい時は多くの個体を繋ぎ、夏でも 3 頭立ての乗用橇を乗り回すことは普通である。xiii その

ような中で、二頭立て、一頭立ての実例がある記載は興味を呼び起こす。ただ權の牽引頭数を左右する最大の要因は負荷であり、それに応じて容易に制御できる範囲のものであるから、そのことをもって極東諸民族の同様の例の存在を指摘すること（FN18:101）は、特段意義のあるものとは言えないであろう。

なお、筆者はヌムトー・グループとプール・グループのトナカイ牧畜類型はツンドラ型と同様の特徴を多く有するため、両グループ間の類似性が高いこと、またこれらの類型の存在は「タイガの狩猟民・トナカイ牧畜民」型経済文化類型の特徴点の移ろいやすさを示している、と述べる（FN18:99）。

このような指摘はあるが、概して、森林ネネツの居住環境はヤマル・ネネツ自治管区南部とハンティ・マンシ自治管区北部（オビ川中流域右岸地域）のツンドラから森林ツンドラ、そして森林ツンドラからタイガへの遷移帯という植生環境が混淆している地域である。その中で孤立的に相対的に小規模なトナカイ群を保有しつつ、限定的数の宿营地間を近距離移動する、季節移動ないし半遊動的な生活、という点で、森林ネネツのトナカイ牧畜のコアの部分は一致しているようである。その文化的コアの周辺に、よりツンドラ地帯的（ツンドラ・ネネツ的）要素を多く呈する集団、あるいは、タイガ地帯の住人であるセリクープ、ハンティ、森林エネツなどの文化要素からの影響を受けてきた集団がある、という構図であると考えた方が分かりやすいと思われる。とはいえ、本稿は先行研究の紹介とその限定的な分析や比較に限定しているため、これ以上の憶測は控えることにしておきたい。

* * * * *

上記のように、筆者が入手できた範囲ではあるが、ロシア・ソ連民族学における森林ネネツのトナカイ牧畜に関する先行研究を概観してみると、トナカイ牧畜の放牧技術、群管理、経営技術といった牧畜文化の本質的側面の研究は、ほとんど有機的、総合的な形ではなされていないのが現実、という構図が改めてみえてくるのである。森林ネネツのトナカイ牧畜研究は、従来の先行研究ではとても十分とは言えない状況であることは確かである。この点は上記の M.A.ゼニコ・ネムチーノヴァも、「森林ネネツの文化に対する近年の先住民の郷土研究科を含む専門家の関心の高まりにも拘らず、このサモエード系民族トナカイ牧畜システムの民族文化的特徴は研究があまりなされていない」と認める状況にあることを述べておきたい。

現在の森林ネネツの居住環境は極めて脆弱である。それは、まず第一に、彼ら

は種々の理由により、現在のヤマル・ネネツ自治管区とハンティ・マンシ自治管区の境界付近の地域に居住地を定め、小グループを構成しつつ、それぞれの固有の自然環境に適応することを余儀なくされつつも、トナカイ牧畜を含む複合生業を適宜選択してかろうじて生存してきた、という状況自体にある。第二にその居住環境が、1970年代より継続されてきた石油・天然ガス採掘活動とその関連産業や都市化により、この地域は痘痕状に開発地が広がり、物理的な居住地・放牧地が決定的に減少し、同時に土壌・水系の環境汚染が継続している状況にあるからである。

プール地区行政府の刊行した先住民文化の保存に捧げられた冊子『真の人間の大地』(FN17;2005年)によれば、プール川中・下流域の森林ネネツの悲劇的な状況が記されている。即ち、「例えば、森林ネネツのタイガ型ネネツ複合生業システムは、産業開発のための広範な生業用地の接収による最もディフォルメされたものである。一連のケースにおいて、行政当局の気紛れにより、先住民は伝統的生業従事の可能性を失い、或いは深刻な状況にまで侵害されている。サンプルグ・ツンドラの森林ネネツとトナカイ牧畜民の土地は、鉄道や自動車道路、パイプラインや送電線により至るところで寸断されている。森林ツンドラ型とタイガ型の混合したタイプであったウレンゴイの森林ネネツは消滅してしまった。・・・」(FN17:62)。この冊子は、一方で開発を奨励し、またそのことで財政的潤沢さを獲得してきたプール地区行政府の文化委員会の発行したものであることから考えれば、現地の複雑な状況が垣間見えてくるのである。

とはいえ I.A.カラペトヴァや M.A.ゼニコ・ネムチーノヴァの研究・調査状況によれば、また本稿筆者の2008年3月の短期間のプール川中流域、ハランプール・グループの森林ネネツの宿営地での調査の状況^{xiv}からみても、個人経営者や先住民企業(オブシーナ)に再編された家族単位で半遊動生活を送る家族経営者等を中心に、トナカイ牧畜に関する各種調査も未だ相当程度可能であることはいえそうである。

(よしだ あつし・千葉大学文学部)

*参考文献リスト (*印は既見書/論文)

A : ネネツ関係文献 (本稿関連に限定)

B : 森林ネネツ関係文献

C. 西シベリア諸民族研究関係文献 (本稿関連に限定)

A : ネネツ関係文献 (本稿関連に限定)

ネネツに関する人類学的、民族学的研究は、その学術的体系性を問わなければ、既に19世紀帝政ロシア期より行われている。学術性を考慮すれば、以下N1-N8の著作が概説的民族誌といえる：

- N1 Старцев Г.А., *Самоеды (ненца). Историко-этнографическое исследование.* Л. 1930.*
N2 Вербов Г.Д., Пережитки родового строя у ненцев. СЭ. №2. 1939. Стр. 43-66.*
N3 Прокофьева Е.Д., Ненцы В кн. Левин М.Г., Потапов Л.П. (ред.), *Народы Сибири.* М.;Л.: Изд. Академии наук СССР. 1956. Стр. 608-647.*
N4 Хомич Л.В., *Ненцы. Историко-этнографические очерки.* М.;Л.: Наука. 1966.*
N5 -----, *Проблемы этногенеза и этнической истории ненцев.* Л.: Наука Ленинградское отделение. 1976.*
N6 Головнёв А.В., К истории ненецкого оленеводства. В кн.: *Культурные и хозяйственные традиции народов Западной Сибири.* Новосибирск: . 1989. Стр. 94-108.*
N7 Васильев В.И., Ненцы. В кн.: *Народы Сибири и Севера России в веке (этнографическая характеристика).* М.: Ин-т этнологии и антропологии РАН. 1994. Стр.29-62.*
N8 Хомич Л.В., *Ненцы. Очерки традиционной культуры.* СПб.: Русский двор. 1995.*

B : 森林ネネツ関係文献

森林ネネツに関して、包括的ないし何らかの文化的特徴を一つのテーマとして明示的に取り上げた著作、研究で現時点で確認できたもののうち、既見のもの（発刊年号順；但し*印のものは未見）：

- FN1 Голодков Б.Н., Краткий очерк населения крайнего северо-востока Западной Сибири. *Изв. Имп. РГО* Т. LVIII. 1926. Вып. II. Стр. 50-78. *
FN2 Юданов И.Г., Тазовский район. Красноярск. 1928.*
FN3 Митусова Р.П., Год среди лесного народа. *Вокруг света*, 1929. №11, 12, 14, 15.
FN4 Ткаченко Н., Лесные самоеды. СС. 1931, №6. Стр.88-91.*
FN5 Вербов В.Г., 'Лесные ненцы' СЭ 1936 №2. Стр.57-70.*
FN6 Долгих Т.Б. Традиционное жилище лесных ненцев бассейна реки Пур. СЭ, 1971, №4. Стр.93-103.*
FN7 Хомич Л.В., Некоторые особенности хозяйства и культуры лесных ненцев. В кн.: *Охотники, собиратели, рыболовы. Проблемы социально-экономических отношений в*

доземледельческом обществе. Л.: 1972. Стр. 199-214.*

- FN8 Васильев В.И., О генетической природе этнических компонентов лесных ненцев. СЭ, 1973, №4. Стр. 106-112.*
- FN9 Козьмин В.А., «Традиции в развитии современного оленеводства таежной зоны Западной Сибири.» В кн.: *Культурные традиции народов Сибири*. Л.: Наука ленингр. отд. 1986. Стр.42-56.*
- FN10 Тихонов С.Н., Летние стойбища и жилища лесных ненцев (по материалу бассейна р. Пур). В кн.: *Генезис и эволюция этнических культур Сибири. Сборник научных трудов*. Новосибирск: Сибирское отделение АН СССР. 1986. Стр. 77-85.*
- FN11 Карапетова И.А., Соловьева К.Ю., Проблемы традиционного природопользования лесных ненцев и восточных хантов. В кн.: *Проблемы историко-культурной среды Арктики*. Сыктывкар, 1991. *
- FN12 Карапетова И.А., Соколова З.П., Соловьева К.Ю., Этносоциальная ситуация и проблемы традиционного природопользования восточных хантов и лесных ненцев. В кн.: *Народы Сибири Кн.2 (Сибирский этнографический сборник 7)*. М.: Ин-т этнологии и антропологии РАН. 1995.Стр, 5-20.*
- FN13 Трутина П.Г., *По тропам моих предков и моего детства*. Екатеринбург: Баско, 2000.*
- FN14 Перевалова Е.В., Беглицы: К истории родов лесных ненцев. В кн.: *Самодийцы. Материалы Сибирского симпозиума «Культурное наследие народов Западной Сибири» (10-12 декабря 2001 г., Тобольск)*. Тобольск-Омск. 2001. Стр. 143-147.*
- FN15 Карапетова И.А., Место оленеводства в хозяйственном комплексе лесных ненцев. В кн.: *Самодийцы. Материалы Сибирского симпозиума «Культурное наследие народов Западной Сибири» (10-12 декабря 2001 г., Тобольск)*. Тобольск-Омск. 2001. Стр. 206-208.*
- FN16 Трутина П.Г., *Лесные ненцы. Сказания Земли Пуровской*. Новосибирск: изд. СО РАН Филиал «Гео». 2004.*
- FN17 Хэно И.С. (автор-составитель), *Земля неней ненеча – Земля настоящих людей. Историко-культурное наследие*. Сборник. Тарко-Сале: Администрация м.о. Пуровский район. Комитет культуры. 2005.*
- FN18 Зенько-Немчинова М.А., *Сибирские лесные ненцы: историко-этнографические очерки*. Екатеринбург: Баско, 2006. Стр.84-104.*
- FN19 Гардамшина М.И., Чеботаева Н.А., Калитенко Е.В., Саврасова Г.П.. *Лесные ненцы*. Новосибирск: ИНФОЛИО. 2006.
- FN20 Квашнин Ю.Н., Лесные ненцы п. Ханымей. *Вестник археологии, антропологии и этнографии*. №8. 2007. Стр. 252-256.*

С : 西シベリア諸民族研究関係文献 (本稿関連に限定) :

- WS1 Дунин-Горкавич А.А., *Тобольский Север*. I. СПб. 1904. *
- WS2 Доброва-Ядринцева И.Н., *Туземцы Туруханского края*. Новониколаевск: Издание Сибревкома. 1925.*
- WS3 Городков Б.Н., Краткий очерк населения крайнего северо-востока Западной Сибири. *Известия гос. РГО*. Том LVIII. 1926. Вып. 2. Стр. 50-78.*

- WS4 Прокофиева Е.Д., Ненцы. В кн.: М.Г. Левин, Л.П. Потапов (ред.) *Народы Сибири*. М.;Л.: Изд. АН СССР. 1956. Стр. 608-647. *
- WS5 Васильев В.И., Система оленеводства лесных энцев и ее происхождение. *Краткие сообщения. Ин-т этнографии АН СССР*. 1962. №37. Стр. 67-75.*
- WS6 Головнёв А.В., *Историческая типология хозяйства народов Северо-Западной Сибири*. Новосибирск: Из-во Новосибирского -та. 1993.*
- WS7 В.А. Козьмин, *Оленеводческая культура народов Западной Сибири*. СПб.: Изд. С.-Путербургского университета. 2003.*
- WS8 Головнёв А.В., Хозяйство, калердарь. В кн.: Гемуев И.Н., Молодин В.И., Соколова З.П., *Народы Западной Сибири. Ханты. Манси. Селькупы. Ненцы. Энцы. Нганасаны. Кеты*. М.: Наука. 2005. Стр. 410-424. (Глава 3)*

注)

- i 佐々木史郎、井上統一、本稿筆者(吉田睦)等である。
- ii 日本学術振興会・科学研究費補助金 19401040「極北先住民の生存・共生システムとしてのトナカイ牧畜文化の研究」(研究代表者:吉田睦)による調査。参加者は本稿筆者の他、高倉浩樹東北大学准教授、M.A.ゼニコ・ネムチノヴァ。
- iii なお、筆者の管見では、新聞報道等の中で唯一、次のものがある:『シベリアの温暖化 ピャクの大地①-⑤』朝日新聞夕刊、2003.8.26, 28-30, 9.1。著者の記者(小林浩幸)は取材前に本稿筆者と会っている。地球温暖化の中での先住民の生活の変化を主題にした短いポルタージュである。
- iv 「ユラク」とは、ネネツのうちシベリア部(ウラル山脈以東)に居住するネネツ、あるいはその中でも更に東部地区(現在のヤマル・ネネツ自治管区ターゾフスキー地区、クラスノヤルスク地方ドルガン・ネネツ自治管区)に居住したネネツの旧称で、19世紀から20世紀20年代頃まで(一部は1940年代まで)、行政的にも学術的にも使われた。ツンドラ・ネネツ全般をユラク、あるいはユラク・ネネツということもある。従って、ここで森林ネネツをユラクの範疇の中で紹介しているのは稀なケースといえる。
- v 同時期に同じ実施機関によりこの地域を調査実施した R. P. Mitusova がより詳細な記録(FN2)を残しているが、筆者は未入手である。
- vi 「サモエード」は、サモエード(サモディ)系諸民族の総称としても、またその中の「ネネツ」の旧称としても使われた。
- vii 更に、1924年まではアイヴァセダ族全体で3000頭のトナカイがいたが、同年以降の炭疽の流行で半数以上を失ったこと、またトナカイを失ったアイヴァセダは富裕牧夫(ハンティ系氏族のカズィムキン族の住み込み牧夫として働くようになった、といった記述に注意が向けられる。
- viii 毛印は1-2歳の個体を中心に、脇腹にナイフで特定の形状(世襲の伝統のある

形状もあれば、ロシア文字のアルファベットもある)に毛を切り取って印をつけるもので、ツンドラ・ネネツ、特に個人経営者の間では一般的である。

^{ix} ネネツ語「ヌム」は至高(太陽)霊の名称、「トー」は沼、湖の意)

^x 少なくとも次の動画資料において確認できる：NHKビデオ『世界の秘境』シリーズ、『秘境シベリア(1)－ツンドラの遊牧民－』(制作年不詳だが、1990年頃の取材による)

^{xi} なお、同書筆者はツンドラ・ネネツの首枷(ツンドラ・ネネツ方言でロンガリ(лонгали))がヤマル半島で種オス個体に付けられている旨述べているが(94)、ギダン半島の例では首枷をつけるのは専ら特定の去勢オス個体であることから、何らかの誤りであると推測される。通常ツンドラでは、首枷は春季から初夏にかけて新生個体が群にいるときに、それらに危害が及ばないことと橇牽引個体を投げ縄で捕獲しやすいことを目的として施すものであるが、種オス個体を橇牽引に使う例は限定的である。なお木片や角を加工した首枷はツンドラ・ネネツにおいて多用され、本稿筆者はギダン半島において5-7月に頻繁に使用しているのを確認している。2005年5月にはペットボトル製のものまで出現していた(タナマ川流域)。

^{xii} 本稿筆者は2008年3月のプール川中流域のキャンプで実見している。なお、2-3歳個体への給餌(スープの残りなどを戸外で与える)はツンドラにおいて調教の一環として行われている(2001年11月の本稿筆者のヤマル・ネネツ自治管区ターゾフスキー地区ギダン半島での現地調査による)。

^{xiii} ネネツは周辺民族から、夏でも橇に乗る怠惰な民族、というような言い方すらされてきた。生態環境に適応した利用法、という捉え方が適正であるのは勿論である。

^{xiv} 当該調査の内容については、別途報告する予定である。

Reindeer Herding among Forest Nenets, West Siberia, Russia (A brief introduction about preceding studies in Russia)

YOSHIDA Atsushi

Summary:

The Nenets, one of the indigenous peoples of the North in Russian Federation, can be divided into two dialect groups – the Tundra Nenets and the Forest Nenets. The latter is minority even among the Nenets (42,000 peoples) and numbers just about 2,000 peoples, living scattered in the Forest Tundra – Taiga vegetation zones of the southern part of the Yamal-Nenets Autonomous District and the northern part of the Khanty-Mansi Autonomous District in West Siberia. The Forest Nenets, as the most of nomadic Tundra Nenets, is also famous as reindeer people, but their dependence on reindeer herding itself as the subsistence activity is lower than that of the Tundra Nenets. Beside reindeer herding they are engaged in fishing, gathering and so on.

In this article the author introduces the contents of the main academic works which refers to reindeer herding and published in Russia from 1920's to nowadays. Each article or book about reindeer herding mainly concerns with the typology of herding – summer herding pattern, usage of the mosquito-fumigation, existence of reindeer house, small or large number of the herd, the borrowing relationship in the technique of herding with the neighboring people groups – Tundra Nenets, Khanty, Selkup, Enets, Tungus and other elements of the reindeer herding and husbandry, typical for the Forest Nenets. Their reindeer herding, and the Forest Nenets themselves, are on the verge of the catastrophe, faced with oil-natural gas exploring activities from 1970's and pollution problems as a result of such activities, and the socio-economic changes.